

前置詞目的語の代名詞化に対する語用論的制約 : -- "Verb-Preposition[+DR]"結合に関して

江口, 巧
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5484>

出版情報 : 言語文化論究. 言語情報特集号, pp.1-14, 1999-10-31. 九州大学言語文化部
バージョン :
権利関係 :



前置詞目的語の代名詞化に対する語用論的制約

--"Verb-Preposition[+DIR]"結合に関して

江 口 巧

1. 序

英語には、"take off the shirt" と "get off the bus" のように表面的に類似した動詞句が存在するが、その構造は異なっており、例えば、前者では "take the shirt off" が許されるのに対し、後者では "get the bus off" が許されないことから、それぞれ"動詞-不変化詞(V-Prt)"結合、および "動詞-前置詞(V-P)"結合と分析される。

さて、この二つの動詞句が、次のように句末に代名詞を伴った場合、その文法性や出現頻度においても若干異なる。

(1) *John took off it(=the shirt).

(2) Mary got off it(=the bus).

(1)の非文法性については、江口(1999)で論じたように、基底構造において take の直後にあった代名詞 it が、情報量が少ないにもかかわらず、卓越性の与えられる文末に移動しているからであると説明される。一方、(2)において off は前置詞であり、代名詞 it はその目的語の位置にとどまっているため、統語的変則性はない。しかし、3章で提示されるデータが示すように、このような形での出現頻度はかなり低い。

本稿では、この(2)のタイプの "V-P"結合を主な考察の対象として取りあげ、それが代名詞目的語を伴った形は、文法的には全く問題がないにもかかわらず、その事例が少ないことの原因を二つの観点から語用論的に説明していく。また、代名詞目的語と結びつきにくいという傾向は、(2)のタイプの結合と共通した特徴をもつ前置詞についても顕著にみられ、これについても "V-P"結合の場合と同じ説明が適用可能であることが論じられる。

2. 前置詞目的語の省略--交替形の平行性

序章で提示された問い、つまり "V-P"結合が代名詞目的語を伴う事例がまれであるのはなぜかに対して答えを出す前に、まずこの "V-P"結合に特有の特徴を押さえておく必要がある。"V-P"結合は次に示すように、前置詞の目的語がコンテキストや世間知から理解される時にはその省略が可能である。

(3) John walked up (the hill).

(4) He saw me from the upper window and came down (the stairs) to say hello.

(Dixon (1982: 13))

このように、その目的語が省略可能な前置詞は、文字通りの空間的意味をもち、方向を表

わすとされる(cf. Emonds 1972, Fraser 1974, Dixon 1982, Quirk et al. 1985)。したがって、次のように前置詞が用いられていても、もはやイディオムの一部として文字通りの意味を失っている場合は、目的語は省略できない。

(5) The police looked into(=investigated) *(the matter).

(6) Bob takes after(=resembles) *(his father).

よって、以下考察の対象となる "V-P"結合は、前置詞が[+DIRECTION]の意味素性をもったものであるため、以降は "V-P[+DIR]"結合と表記される。

上の(3)、(4)に示したように、目的語が省略されて後に残った up や down などを、ここで不変化詞とみなすとする、(3)、(4)のような "V-Prt[+DIR]"結合以外に、冒頭に挙げた "take off"や(8)の "run up" など、"V-NP-Prt" の構造をもつ他動的(transitive)結合(cf. Dixon(1982: 29))も不変化詞が同じ[+DIR]の素性をもつので、ここでの考察の対象にはいつてくる。

(7) He took the shirt off (the body).¹

(8) He ran the flag up (the pole).

つまり、(7)、(8)において、the body や the pole は、話し手と聞き手が共有する世間知により容易に理解されるため省略されたものと考えられる。

さらに、前置詞の後で省略される要素は目的語名詞句に限らない。in や out などの場合は、次のように、後続する前置詞句が省略されているとみなされる。

(9) Mary came in (to the room).

(10) Bob went out (of the house).

省略されているものが名詞句であるにせよ、前置詞句であるにせよ、前置詞(あるいは不変化詞)と省略要素との間には一様な関係が認められ、認知文法の用語を用いれば、省略要素は前置詞のランドマークということになる。複数のものが関与していて、そこにある関係が成立している時、認知文法ではその参与者の中で際立つ方をトラジェクター、一方その基準点となるものをランドマークとする。目的語名詞句が省略された(3)で、前置詞 up が表わす関係のトラジェクターはジョンであり、ジョンはランドマークである丘の上に位置している。前置詞句が省略された(9)においても、前置詞 in により、メアリー(=トラジェクター)が移動の結果、部屋(=ランドマーク)の中に位置することが表わされている。

以上概観した前置詞目的語の省略という現象について、過去の研究者たちの見解を若干ふれておく。

Emonds(1972)は、まず多くの前置詞が同時に不変化詞でもあること、また以下に示すように、方向を表わす前置詞と不変化詞が類似した分布をなすことに注目し((12)は、ともに強意の副詞 right で修飾されうること示す)、方向を表わす前置詞と不変化詞を同一の範疇に統合し、不変化詞はその目的語を欠いた自動的前置詞(intransitive preposition)であるとする見方をとっている。

(11) John put some toys in the garage, downstairs, away, down, together, back, out, etc.

(Emonds (1972: 550)) (下線筆者)

(12) a. We went right along that road.

b. John came right in.

(ibid.: 551-552) (下線筆者)

Dixon(1982)は、さまざまなタイプの句動詞の基底構造を論じた研究であるが、例えば、bring in the milk の基底構造を bring the milk in とすることの根拠を、この構文と bring the milk into the kitchen との平行性に求めている。また Dixon は、このタイプの構文において目的語が省略されたとしても、その文が現れた特定のコンテキストにおいて意味の違いは生じない(Dixon (1982: 13))と述べている点が注目されよう。

O'Dowd(1998)のこのタイプの構文についての分析は、一部 Lindner(1981)の見解を受けついでいる部分があるが、両構文の違いは結局のところ、ランドマーク(前置詞の目的語)がコンテキストに依存して明示されるか否かという違いに帰せられるのであり、不変化詞と前置詞というカテゴリーの区別は、内在的特性の違いによるのではなく、コンテキスト的なものであるという見方をとっている。

以上、過去の三つの研究を取り上げ、前置詞目的語の省略という現象についてのそれぞれの分析を簡単にみたが、いずれの研究も、方向の前置詞句を伴う構文と前置詞目的語が省略された構文との平行性を論じ、また、前置詞と不変化詞を同一範疇とみなしている(特に O'Dowd は、両範疇を包括する P-form という上位カテゴリーを導入している)という点において共通性がみられる。しかし、4章で論じられるように、我々がこの論文で問いかけた主テーマ--なぜ "V-P[+DIR]" 構文には代名詞目的語が少ないのか--に立ちもどって見た時、この両構文の平行性にのみ目を向けていると見逃してしまう部分もあることには注意しておかなければならない。

3. 前置詞目的語の代名詞化に対する語用論的制約

この章ではまず、"V-P[+DIR]" 結合が代名詞目的語を伴うことが少ないという事実を実際のデータをもとに検証し、次にこの事実に対して、2章での論点も含めた語用論的説明を試みる。また、"V-P[+DIR]" 結合の前置詞と同じく、その目的語が省略可能な前置詞についても、やはり同様の傾向が見られるが、この事実に対しても、"V-P[+DIR]" 結合の場合と同じ説明が適用される。

まず、"V-P[+DIR]" 結合がどのような形態の目的語名詞句と結びつくか、実際に英文から用例を収集しデータをとったが、その結果を以下に示す。具体的には、目的語が定名詞句で現れた場合、代名詞形で現れた場合、省略された場合の三つのケースに分け、その頻度と割合を調べた。代名詞は、人称代名詞を含めて、一部、言語外的な発話の状況を指示する用法もある (cf. Quirk et al.(1985:347))が、大部分が言語的文脈を指示するいわゆる内部照応の(endophoric)用法であるので、これと平行して、定名詞句についても、先行文脈

内の指示対象をさす定名詞句に限定して収集した。また、"V-P[+DIR]"結合の場合と比較対照のケースとして、二つのタイプの前置詞に関するデータも収集した。一つは、"V-P[+DIR]"結合以外の環境で現れるが、やはり目的語が省略可能な前置詞、もう一つは、at、from、of、for など、目的語が省略不可能な前置詞であり、これらについても同様に、目的語名詞句の形態別の出現頻度を調べた。三番目のタイプの前置詞の場合、その目的語は省略できないため、ゼロ形式の頻度が0であるのはいうまでもない。また、パーセンテージで示された数字は、三つのタイプの前置詞それぞれの全出現例数に対する、個々の形態の出現の割合を示したものである。最後に、このデータは、"V-P[+DIR]"結合がなるべく頻繁に現れることを予測して、動きの描写が多いと思われる物語風のフィクションから用例を収集したことを付記しておく。

表 1. 前置詞の目的語名詞句の形態--その頻度と割合

Morphological Form	"V-P[+DIR]"	Ps with Deletable Objects	Ps with Undeletable Objects
Definite NP	83 (32.4%)	17 (28.3%)	235 (60.9%)
Pronoun	14 (5.5%)	10 (16.7%)	151 (39.1%)
Zero Form	159 (62.1%)	33 (55.0%)	0 (0.0%)
Total	256 (100.0%)	60 (100.0%)	386 (100.0%)

上の表から、代名詞目的語を伴った"V-P[+DIR]"結合の出現例が、この結合の全出現例中わずか 5.5%ときわめて少ないことが一目瞭然である。これに対して、この結合の目的語が省略された割合は、6 割強にのぼっている。2章でみたように、省略される要素はコンテキストから復元可能であったり、発話の参加者が共有する社会・文化的知識から理解されるものである。言語において省略の起こる最も典型的なケースは、次のように発話時の状況的コンテキストが省略される例であろう。

(13) There is a nice restaurant two miles ahead (of us).

(14) Now let us go back to the issue mentioned above (here).

(15) I've been to the U.S. before (now).

これらの発話文において、聞き手(読み手)の側での省略要素の同定には何の問題もなく、特別の事情でもない限り、これらの要素は明示されない。ある要素が言語的コンテキストや世間知から十分に理解される場合についても、全くこれと同様のことがいえ、そのような要素を繰り返すと、特別な効果を意図したのでない限り、かえってスタイル的な冗長さを招くであろう。次に挙げる例は"V-P[+DIR]"結合で目的語が省略された例を引用したものである。

(16) When the lift arrived, he stepped inside.

(Treacher, P. and H. Ohyagi, *The Adventures of Mr Bunion*)

(17) He ruined one of my suits with blood once, but he got the tooth out.

(Thornley, G. C., *True or Not?*)

(18) Mrs. Bramble examined it(=the dress) closely inside and outside, and after asking permission, tried it on. (ibid.)

(16)では、直前の節の内容からエレベーターに乗り込んだことは明らかであり、それをあえて示す必要はない。(17)、(18)では、それぞれ口の中から歯を抜くこと、体の上に服を着ることは誰もが知る常識であり、それを明示することはかえって不自然さを招くことになる。概して英語では、十分に復元可能な情報は可能な限り削除することが要求されているといえる。

一方、前置詞の目的語として、定名詞句が現れた例を見てみると、それらの指示対象が先行文脈において当該名詞句の直前に現れるなど聞き手の認識の中で特に際立っていると考えられるケースはほとんどない。目的語が省略されずに明示されなければならない理由はそこにあると考えられる。

では、前置詞の目的語として代名詞を用いた場合はどうであろうか。Ariel(1990)が示したデータによると、代名詞の先行詞は、その8割が同じ文もしくは直前の文に現れており、代名詞はかなり接近可能性(accessibility)²の高い指示対象に言及する際に用いられるという。Gundel, Hedberg and Zacharski(1993)の提示した Givenness Hierarchy においても、強勢のない代名詞は、ゼロ形式と同じく最も高い階層に位置づけられ、指示対象に焦点がおかれている(in focus)ことが代名詞の使用の必要十分条件であるとされる。こうした諸学者の見解からしても、代名詞が指示する対象は、聞き手の認識の中できわめて高い程度に活性化しているといえよう。とすれば、そのように際立ちの高い要素をわざわざ前置詞の目的語として明示することの意義は薄いといわざるをえないだろう。もちろん、指示対象そのものの際立ちの度合いと、それが前置詞の目的語として生ずることが予測されるかどうかは厳密には区別されるべきものであり、上に挙げたデータにも見られるように、代名詞であっても目的語として明示された事例も現に存在する。しかしながら、実際上の傾向としては、談話の特定の場面で際立ちの高い指示対象は、同時に、前置詞の目的語としても現れることが十分に予測され、それゆえ、多くの場合において結果的に省略されることになるといえる。上の統計で、目的語が代名詞で明示される頻度に比べ、省略される頻度が圧倒的に高い(5.5% vs. 62.1%)のもそのことを裏づけているといえよう。

以上のように、"V-P[+DIR]"結合が代名詞目的語を伴うケースが少ないのは、英語において、コンテキストから復元されて十分に際立ちの高い要素は省略されることが要求されるからであるが、2章でみたように、"V-P[+DIR]"結合の前置詞の目的語が、統語的に省略を許される環境にあるという点も見落としてはならない。とすると、"V-P[+DIR]"結合と同様に、統語的にその目的語の省略を許す前置詞についても、代名詞目的語は生じにくいのではないかと予測されるが、これは上に挙げたデータによって実証される。この類の前置詞で代名詞目的語を伴っているのは、全出現例中 16.7%であり、また、定名詞句を伴った事例および目的語が省略された事例ともに、その割合は、"V-P[+DIR]"結合の場合とかなり似かよった数字を示している。さらに、このことに関連して興味深いのは、統語的

に目的語の省略が不可能な *at*、*from*、*of*、*for* といった前置詞では、代名詞目的語を伴う割合が、40%近くにはね上がっていることである。省略が不可能であれば、いかに際立った指示対象であっても、それを代名詞の形で明示することが要求される。このようなことから、代名詞目的語を伴いにくいのが、統語的に目的語の省略を許す前置詞に共通した特徴であるといえる。以下に、まず"V-P[+DIR]"結合以外の環境で、前置詞の目的語が省略された例を挙げる。

(19) The green dress that came next was objectionable. (Thornley, G. C., *True or Not?*)

(20) But if the signal was red, the one behind ought to have shown yellow... (ibid.)

(21) ...he was glad that the volcano was far away and that there were at least three mountains between. (Buck, P. S., *The Big Wave*)

(19)において省略されている目的語は、緑のドレスの前に、店員によってすすめられたドレスであり、(20)においては、列車が今通過したばかりの赤信号である。(21)は、ある火山の爆発を恐れる少年が、その火山が遠くにあつて、それと彼との間に三つ山があることを喜んでいることを描写している。いずれの例でも、省略されている要素は、至近のコンテキストにあり、聞き手(読み手)にとっては容易に復元されるものばかりである。なお、用例は省略するが、ここでのタイプに属する前置詞としては、上に挙げた以外に *away* (from NP)、*in front* (of NP)、*since* (NP)、*besides* (NP)などが挙げられる。

次に、目的語の省略が統語的に不可能な前置詞に関して、目的語が代名詞で現れた例を挙げておく。

(22) Although he was new at this job, he became quite good at it.

(Treacher, P and H. Ohyagi, *The Adventures of Mr Bunion*)

(23) And when dawn finally came, he leaped up and hurried outside to look for her.

(McCarthy, R. F., *Once upon a Time in Japan*)

(22)において、*it* の先行詞は直前の節の *this job* である。(23)は、老人が自分の妻に舌を切られた雀のことを心配して探しに出かける状況を描いているが、この直前の談話には、その舌を切られた雀のことが述べられており、*her* の指示対象はいわゆる談話トピックとなっている。このように、いずれの例においても、代名詞の指示対象は極めて際立ちの高い要素であるといえるが、にもかかわらず、統語的に削除することが許される環境にないため明示されている。

以上、この章での議論をまとめると、"V-P[+DIR]"結合において代名詞目的語を伴う事例が少ないのは、英語において、コンテキストから復元可能な要素は、統語的に容認される限りにおいて省略することが望まれるため、代名詞の指示対象のように極めて際立ちの高い要素を明示することは好ましくないからであるといえる。そしてこのことは、"V-P[+DIR]"結合の場合と同様に、その目的語が統語的に省略可能な前置詞についてもあてはまるものである。

4. もうひとつの理由--ランドマークの明示化と焦点化

前の章では、"V-P[+DIR]"結合が代名詞目的語を伴うケースが少ない理由を、復元可能な要素の省略、および、高い接近可能性をもつ指示表現としての代名詞の機能という語用論的観点から説明を試みた。しかし、この事実を説明するためには、上に見た観点以外に、また別の視点からの考察も必要になってくると思われる。2章で我々は、前置詞の目的語が明示された構文と省略された構文の平行性を論じ、また方向の意味をもつ不変化詞と前置詞を同一範疇とする諸学者の見解をみた。Dixon(1982)に至っては、両交替形の間には意味の違いは生じないと論じていた。ここで確かに、Dixon のいう意味の違いというのがどのレベルの意味の違いを意図しているのか、その文脈からだけでは推し測れない。しかし、もし語用論的レベルの意味の違いまで意図されているのであれば、例えば Lindner(1981)の挙げた次のような例を目にした時、今の Dixon の見解には疑問を抱かざるをえない。

(24) a. Mary washed the spot out.

b. Mary washed the shirt out.

(Lindner(1981: 184))

Lindner によれば、a と b は、しみとシャツのどちらが際立っているかによって、語彙化される項目が異なることを示している。³ a と b で省略されている要素を補うとすれば、それぞれ、シャツとしみということになり、Dixon 流に文の意味を省略された要素まで含めて考えるとすると、結局、a と b は同じ事態を描写していることになり、二つの文の意味は同じということになってしまう。しかし、これらの文においては明示化される要素が異なっているわけであり、我々は、ある要素が明示化される場合とされない場合とでは当然意味の違いが生じると予測するのである。とすると、前置詞の目的語が省略されたケースで、たとえそれがコンテキストや世間知から補われるとしても、その目的語が明示化された場合とを比較すれば、語用論的な意味の違いが生じるのではないかと予測される。

上に述べた点に関連して、O'Dowd(1998)が論じている、不変化詞と前置詞と機能の違いに関する議論が注目に値する。O'Dowd は、不変化詞と前置詞が果たす役割を、それぞれ *situating*、*linking*(O'Dowd(1998: 55 ff.))という用語で表わしているが、わかりやすい言葉でいうと、*situating* とは状態または状態変化を叙述することであり、*linking* とはランドマーク(前置詞の目的語)を談話に導入することである。例えば、"throw the kitten out" の場合、不変化詞 *out* は、そのトラジェクターである子猫が外へ(投げ)出された状態(変化)を描写している。一方、"throw the kitten out the window"のように前置詞目的語が明示された場合、前置詞 *out* の役割は、ランドマークである窓を談話に導入して、子猫が投げ出されたのが窓の外であることを示すことにある。2章において、二つの交替形は、コンテキストに依存してランドマークが明示化されるかどうかの違いであるという O'Dowd の見解にふれたが、彼女によれば、この違いは結局、話し手がランドマークに焦点をあてようとするかどうかの違いであるとされる。したがって、仮にランドマーク自体、先行文脈から

復元可能であったとしても、話し手がこの要素に聞き手の注意を引こうとするのであれば、それは明示化されることになる。一方、ランドマークが焦点をあてるに値しないと判断されれば、それは明示化されず、今度は相対的に不変化詞の方に焦点がおかれるというわけである。このように、O'Dowd の見解によれば、この二つの交替形はその語用論的意味が同じではなく、状態を叙述する不変化詞に焦点がおかれるか、あるいは談話に導入されたランドマークに焦点があてられるかという明確な違いがあるのである。さらに O'Dowd は、こうした交替形における焦点の違いは、一般的に不変化詞、前置詞、およびランドマークが受ける強勢パターンの違いとして文法化しているという。以下は、O'Dowd が提示した、三つの要素が受ける強勢パターンを示したデータである。

表 2. 不変化詞・前置詞・ランドマークの強勢パターン

Element	Primary Stress	Secondary Stress	No Stress	Total Uses
Particle	51%	15%	34%	490
Landmark	70%	13%	17%	627
Preposition	5%	7%	88%	627

adapted from O'Dowd (1998: 95)

不変化詞は、全出現例中 51%が第 1 強勢を受けており、ランドマークの場合は 70%である。一方、前置詞が第 1 強勢を受けているのはわずか 5%であり、88%が強勢を受けていない。こうした強勢パターンの違いからみても、ランドマークを導入しない場合は不変化詞に焦点がおかれ、一方、ランドマークを導入した場合には、そのランドマークそのものに焦点がおかれる傾向にあることが明白である。よって我々は、両交替形の間には、少なくとも語用論的なレベルでの意味の違いが存在すると結論づけなければならない。

そこで、今までの議論をもとに、当初のテーマ、すなわち"V-P[+DIR]"結合に代名詞目的語が少ないのはなぜかという問いに帰ってみると、おのずからその答えが導き出されることになる。つまり、前置詞の目的語を削除せずに明示するということは、ランドマークに焦点をあて、聞き手の注意をそちらに向けるという動機づけがある。にもかかわらず、そのランドマークにそれ自体情報量の少ない代名詞を用いるということは、その動機づけを否定してしまうことになり、語用論的に好ましいことではない。これは、例えば次の例のように、ある要素に焦点をあてるべく変形を施して、その要素を文末に移動したにもかかわらず、その要素が強勢のない代名詞形で現れると、文の容認性が落ちてしまうのとは一部相通ずるところがあるといえよう。⁴

(25) *John was shot by {me/you/him}.

(福地 (1985: 68))

それでは、今"V-P[+DIR]"結合に対して行った説明が、目的語が省略可能な前置詞および省略不可能な前置詞についても適用できるであろうか。今一度、3章の表 1 のデータを確認しておかなければならないことは、目的語が省略可能な前置詞については"V-P[+DIR]"結合とほぼ同じ程度に代名詞目的語が生じる割合が少なく、一方、目的語が省略不可能な

前置詞については、その割合が 4 割程度まで上がるという事実である。結論からいうと、これらの二つのタイプの前置詞についても、上と同じ説明が適用できると考える。まず、前者のタイプの前置詞については、例えば *behind* を例にとって考えると、目的語が省略されて残った前置詞は動詞と結びついていないので、もはや不変化詞ではなく副詞とみなされるが、しかし、"V-P[+DIR]"結合の場合と同様、副詞のみの *behind* と、目的語を明示した *behind* NP では、両形式の違いから機能の分化が起こり、やはり焦点のおかれる要素も前者では *behind*、後者では NP であると考えられる。とすると、やはり焦点のおかれるべき目的語が情報量の少ない代名詞形で現れるのは少ないと予想され、これは先程のデータと一致する。一方、目的語の省略不可能な前置詞、例えば *from* については、目的語を欠いた交替形が存在しないので、その分、目的語への焦点の偏りは、前者のタイプの前置詞ほどではなく、それだけ代名詞形の目的語の出現率は増加すると予想される。そして、この仮説も、やはり先ほどのデータによって裏づけられることになる。

以上この章では、"V-P[+DIR]"結合に代名詞目的語が現れる事例が少ない理由を、3 章の論点とは異なる、両交替形の不変化詞と前置詞の機能の違い、そしてそこから生じる、焦点のおかれる要素の違いという観点から探ってみた。⁵

この章を終えるにあたって注意しておかなければならないのは、「それに焦点をあてるべく導入されたランドマークが、それ自体情報量の少ない代名詞形で現れるのは、語用論的に好ましくない」旨の議論をしてきたが、これはあくまで"V-P[+DIR]"結合が代名詞目的語を伴った事例が少ないという傾向に対して説明を施したのであって、ここでの議論が、"V-P[+DIR]"結合が代名詞目的語を伴うと非文となることを予測するのでは決してないということである。現にデータ上でそのような事例は現れており、そのことは、それらが非文でないことの何よりの証拠である。そこでそうした例について、一般的傾向からは逸脱しながらも、なぜ代名詞目的語が現れているのか、あるいはもっと積極的に、そこではなぜ代名詞目的語が必要とされるのかを探してみたい。そうした例を見るにつけ、我々は O'Dowd が指摘した通り、両交替形の間には、焦点要素の違い、そしてひいては意味の違いが存在することを改めて認識することになる。

下に示す(26)は、"V-P[+DIR]"結合が代名詞 *it* を伴って現れた例、一方(27)は、ランドマークが省略された例である。この二つの交替形を意味の点から比較されたい。

(26) He sent a small green bamboo shoot with seven crooked joints and demanded that it be returned to him with a thread running through it from one end to the other...

(McCarthy, R. F., *Once upon a Time in Japan*)

(27) He(=the ant)'ll head straight for the sugar and bring the thread through with him. (ibid.)

(26)は、侍が節のある竹の枝に端から端まで中を糸が通ったものをもって来るように農民に命令したという内容で、(27)は、その要求に対して主人公の母親がアドバイスをしたもので、蟻の体に糸を巻き、一方の端に砂糖をおいて、反対側に蟻をおけば、その蟻が砂糖に向かって進み、糸を通すというものである。(26)でランドマークが、代名詞という形

態で現れているのは、その指示対象である竹の枝が直前の等位節に現れており、それ自体十分復元可能だからである。ここで、仮に *it* を削除したとしても、談話の流れに大きな影響はないと思われる。しかし、この代名詞を伴った形と、(27)の省略された形を比較すると、動詞の違いは別として、微妙な意味の違いが感じられる。それは、*through* が表わす、(糸が竹の中を)「貫き通っている」状態の意味あいの強さの違いであり、それは(27)の方でより強く感じられる。(26)でもその状態が叙述されているものの、「竹の中を」が代名詞によって明示され、*through* への比重が *it* の方に移る分だけ、*through* が談話において寄与する意味は(27)ほど強くはない。これは結局、ランドマークの明示化いかんで、焦点のあたる要素が変わることによるものと考えられる。

次に、代名詞目的語が現れたもうひとつの例を挙げる。

- (28) After he had climbed some easy mountains, he decided one day to climb a more difficult one; but he did not want to go up it alone... (Hill, L. A. et al., *Listen and Speak*)

この例でも、*it* の先行詞は直前の節に現れた「より難しい山」であり、ここではこの指示対象が新たに談話トピックになっているとはいえ、省略することも可能であろう。しかし、もしここで *it* を削除すると、*go up* がこの特定の山ではなく、一般的な登山ととられかねない危険性がある。そのことを避けるために *it* を明示したのだと考えられる。このように、明示することであいまい性が解消されるのも、やはり、目的語を明示することによって、相対的に不変化詞からランドマークへ焦点が移ったからだと考えられる。次の例についても、同様の説明が当てはまる。

- (29) The trouble with the bus was that drunks would want to get off it every few miles, to exercise their natural bodily functions.

(Radford, A., *Transformational Grammar: A First Course*)

ここの代名詞目的語 *it* は同じ文の *the bus* を指しており、省略も可能であるが、特定のバスに関する問題を述べているので、酔っ払い客がそのバスを降りたがったことを明示するほうが望ましいであろう。

以上のように、代名詞形で目的語を明示した例は、一般的傾向からはずれるとしても、決して非文法性を導くものではなく、省略された場合とは異なる意味あいを生みだしたり、またあいまい性を避ける目的があるなど、それが明示される正当な動機づけが存在する。このようなことから、やはり両交替形の平行性ばかりを強調するのではなく、その意味の違いにも目を向けていくことが正しい方向であると思われる。

5. 要約

本稿は、動詞と、方向の意味をもつ前置詞が結び付いた "V-P[+DIR]" 結合に焦点をあて、それが代名詞を伴う事例が極めて少ないというデータ結果に対して、二つの観点から語用論的説明を試みた。まず2章で、このタイプの結合は、前置詞目的語がコンテキストまた

は世間知から理解される場合には省略可能であり、それゆえ、前置詞目的語を伴わない "V-Prt[+DIR]" 結合と交替をなすことをみた。また、この種の構文に関する過去の三つの研究を概観したが、そこではいずれも、両交替形の平行性が論じられていた。3章で、実際に英文から用例を収集して得られたデータをもとに、代名詞目的語を伴う "V-P[+DIR]" 結合の事例がかなり少ないという事実を確認し、それに対する説明を試みた。そして、英語においては、コンテキストから十分復元可能な要素は可能な限り省略することが要求されるため、代名詞の指示対象のようにきわめて接近可能性の高い要素を明示することは好ましくないと考えた。また4章では、問題の現象に対して別の角度からの説明を試みた。2章においては、両交替形の平行性が論じられていたが、ここでは、O'Dowd(1998)の見解をもとに、前置詞目的語が明示された場合と省略された場合とに生ずる語用論的意味の違いに目を向けた。すなわち、前置詞目的語を明示するのは、コンテキストにランドマークを導入するためであり、この場合、前置詞目的語を省略した場合に比べて、相対的にこのランドマークに焦点があてられるようになるというものである。ところが、聞き手の注意を引くべく導入されたランドマークが、それ自体情報量の少ない代名詞形で現れるのは語用論的に好ましいとされないため、代名詞目的語が現れる事例が少ないと考えた。以上のように、"V-P[+DIR]" 結合と代名詞目的語の結びつきに関する現象に二つの観点からの説明を与えたが、代名詞目的語が生じにくいという傾向は、"V-P[+DIR]" 結合と同じく、統語的に目的語が省略可能な前置詞にも同じ程度にみられ、この傾向に対しても、"V-P[+DIR]" 結合の場合と同様の説明が適用されることが示された。

本稿で提示したデータから明らかなように、代名詞目的語を伴いにくいという傾向は、その目的語が統語的に省略可能な前置詞について顕著であり、省略不可能な前置詞については、代名詞目的語を伴う割合は有意に上昇していた(39.1%)。また、我々が問題の現象に対して施した二つの説明も、目的語が省略可能な前置詞と省略が不可能な前置詞を区別することの正当性を十分に与えるものであった。ただ、この分析結果から、後者のタイプの前置詞に関しては、目的語の代名詞化に対する制約は存在しないと結論づけてよいものか定かでない。我々は4章で、前置詞の役割は、コンテキストにランドマークを導入することであり、この場合、前置詞よりもランドマークの方に相対的に焦点がおかれるとする O'Dowd の見解をみたが、これが広く前置詞全般について適用されると考えると説明のつく言語事実も存在する。例えば、because *(of NP) や despite *(NP) は、instead (of NP) や besides (NP) とは異なり、統語的に目的語の省略が不可能な前置詞である。しかし、このタイプの前置詞でも、because of it や despite it のように代名詞を伴う形はきわめてまれで、定名詞句もしくは指示代名詞(this/that)が生じる。また、「...の代わりをする」を意味する take the place of という成句があるが、これについても take the place of him/her のような形は好まれず、通常は take his/her place と表現される。もっとも、こうした事実を根拠に、今度は前置詞目的語の代名詞化に対する制約が確かに存在するという方向に結論づけるにしても、本稿で提示したデータが示す 39.1%(代名詞) vs. 60.9%(定名詞句)という数

字は、そのような制約の存在を裏づけるのに十分な数字であるとはいえない。⁶ 前置詞全般に関するこの問題に対して確固たる結論を導くためには、より多くのデータと理論的裏づけが必要であろう。

注

- (7)の構造において、the shirt は動詞 take の目的語であり、the body は前置詞 off の目的語である。
- accessibility とは、談話のある時点において、聞き手の認識の中である指示対象がどれほど活性化しているか、あるいはその指示対象がどれほど復元可能であるか、その度合いをいう。
- Lindnerによれば、(24 a)では、相対的に際立っている the spot が語彙化されているという。彼女の用いた「際立ち(saliency)」の概念が、本稿で用いられているこの用語の概念とは異なることに注意されたい。
- しかし、ここで議論している"V-P[+DIR]-Pronoun"と(25)との違いは、江口(1999)で論じたように、(25)は変形の施された有標な構文であるためその文法性は著しく下がるが、それに対し"V-P[+DIR]-Pronoun"の場合は変形が関わっていないので、文法性自体の違反はない。
- 本稿3章と4章で、"V-P[+DIR]"結合が代名詞を伴いにくいという傾向に対して、二つの観点からの説明を試みたが、これについてももうひとつ考えられうる理由がある。筆者が英文から用例を収集する際、go up, run up, walk down といった"V-P[+DIR]"結合が多く現れ、それらが the mountain, the hill, the road などの目的語名詞句を伴っている例をよく目にした。この類の名詞句は、その指示対象が談話に初めて登場する場合でも、よく定名詞句の形で現れており、本稿での収集対象に該当する用例としてカウントされなかったが、これは Prince(1981)の Assumed Familiarity のスケールでは、どの範疇にもおさまりのつかない類の語だと思われる。これらの名詞句は、意味的には経路(path)を表すことになるが、the を伴った定名詞句が用いられているのは、先行文脈のある指示対象を唯一的に特定している(uniquely identify)からだとは必ずしも思えない。したがってこのような名詞句は、談話において二度目以降に現れた場合でも it は用いられにくい。また there では、意図された意味が変わってしまう。代名詞目的語が現れにくいという傾向は、こうしたことも関わっているといえよう。
- O'Dowd(1998: 76 ff.)は、定的で指示的(definite and referential)な指示対象をもつランドマークが代名詞形および語彙形式で現れた割合は、彼女が調査したデータベースにおいて、25% vs. 75% であったと報告し、前置詞全般についてランドマークが代名詞化されにくい旨論じている。しかし、彼女が挙げた統計の中には、本稿3章の表1で示した三つのタイプの前置詞がすべて含まれていると考えられ、そこから、我々が行ったように、目的語が

省略不可能な前置詞のみについてのデータを取り出すことはできない。

参 考 文 献

- Ariel, M. (1990) *Accessing Noun-Phrase Antecedents*, Reutledge, London.
- Dixon, R. M. W. (1982) "The Grammar of English Phrasal Verbs," *Australian Journal of Linguistics* 2, 1-42.
- 江口巧 (1999) "'Verb-Particle'構文の派生について: 機能主義的観点から," 『言語科学』 第34号, 九州大学言語文化部言語研究会, 35-50.
- Emonds, J. (1972) "Evidence that Indirect Object Movement Is a Structure-Preserving Rule," *Foundations of Language* 8, 546-561.
- Fraser, B. (1974) *The Verb-Particle Combination in English*, Taishukan, Tokyo.
- 福地肇 (1985) 『談話の構造』 大修館, 東京.
- Gundel J. K., N. Hedberg, and R. Zacharski (1993) "Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse," *Language* 69, 274-307.
- Lindner, S. (1981) *A Lexico-Semantic Analysis of Verb-Particle Constructions with Up and Out*, Ph. D. dissertation, University of California, San Diego.
- O'Dowd, E. M. (1998) *Prepositions and Particles in English: A Discourse-Functional Account*, Oxford University Press, New York.
- Prince, E. F. (1981) "Toward a Taxonomy of Given-New Information," *Radical Pragmatics*, ed. by P. Cole, 223-255, Academic Press, New York.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Pragmatic Constraints on the Pronominalization of Prepositional Objects

--With Special Reference to the "Verb-Preposition[+DIR]" Combination

Takumi Eguchi

In English, the "Verb-Preposition" combination with directional meaning ("V-P[+DIR]" combination) allows its prepositional object to be deleted so long as it is understood from the context or from general socio-cultural knowledge, and thus alternates with the "Verb-Particle[+DIR]" combination. Based on the statistical findings of recent personal research, however, the "V-P[+DIR]" combination is less likely to occur with pronominal objects. This tendency is also seen with the sub-category of prepositions with deletable objects. The present study gives a pragmatic account of these facts from two different perspectives, one of which focuses on the different aspects of the alternative forms, in contrast to the three previous studies cited here.